

# 博士学位論文審査要旨

2008年12月1日

論文題目： 正岡子規における「写生」概念の研究  
——明治俳諧の諸相の中での再検討——

学位申請者： 青木 亮人

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 真銅 正宏

副査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副査： 文学研究科 教授 神谷 勝広

要 旨：

本論は、明治期の俳句革新者として文学史に有名な正岡子規について、同時代の俳諧の諸相の中で、再検討を加えたものである。

本論は三部から構成される。

第一部は「正岡子規の「写生」と題され、彼の俳句の特質を「写生」という概念をキーワードとして探るものである。その第一章は、正岡子規の俳句における「写生」概念を、それまでの韻文の長い歴史の中に位置づけ、それまでに形成されたあらゆる類型を打ち壊すものとして捉え直している。第二章は、彼が、俳諧のいわゆる宗匠制度とは別に、『日本新聞』のいわゆる「新聞記者」として俳句を詠んだことについて、意義を分析している。第三章は、子規の「写生」概念が、当時新たに移入され始めた、西洋の学問の強い影響下にあるものとし、とりわけ、心理学における「連想」や「印象」などの概念との関連について述べる。

第二部は、「正岡子規と三森幹雄」と題され、当時の旧派とされる、俳諧宗匠の一人の代表的存在である、三森幹雄という俳人との比較を、複数の角度から試みたものである。第四章は、旧派である旧来の宗匠たちの「月並」俳句の立場からは、子規たち新派が「只言」とされ非難された点を取り上げる。旧派が余情を大切にすることに対し、新派は十七字のみの世界にこだわり、これを「只言」としてむしろ称揚しようとする。第五章は幹雄が「俳諧教導職」という特殊な立場にあったことを取り上げ、当時の俳諧が、江戸以来の庶民教化運動と深く結びついていたことを指摘する。さらに第六章においては、これまで西洋画との関係を中心に論じられてきた子規の「写生」概念を、江戸期以来の浮世絵とも共通する構図の問題として論じている。

第三部は、さらに論のパースペクティブを広げ、「明治俳諧の諸相」と題して、子規や幹雄を取り巻く明治俳諧の世界の相対化が試みられている。第七章においては、もう一人の宗匠であった晋永機という俳人を取り上げ、俳諧を通じての彼を取り巻く人物関係の広がり調査している。また、秋声会という尾崎紅葉らが集まった社交サロンと俳諧との強いつながりについても論じている。第八章は、与謝蕪村の明治における受容について、旧派と新派との相違を論じる。結果、永機、幹雄、子規という三人の関係についても、再考が必要であることが導き出された。

以上の検討の結果、正岡子規の革新運動の価値について確認されたことはもちろん、さらに当時の俳諧をめぐるのは、文学史の再編につながるような、旧派と新派の区別を超えるより大きな問題圏が広がっていたことが明らかになった。

なお、論の展開に際し、用例として用いたさまざまな俳人の実作の句については、文学作品の評価につきものながら、論者の評価や解釈について、多少の恣意性が認められるものの、論点に

においては、実に膨大な資料を渉猟し、それらを用いての証明過程も丁寧であり、論旨にも十分な説得力がある。従来の文学史における子規の位置づけを再考しようとする試みは壮大であり、かつ魅力的である。

よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 総合試験結果の要旨

2008年12月1日

論文題目： 正岡子規における「写生」概念の研究  
——明治俳諧の諸相の中での再検討——

学位申請者： 青木 亮人

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 真銅 正宏

副査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副査： 文学研究科 教授 神谷 勝広

要 旨：

上記審査委員3名は、2008年11月28日（金）午後1時から、約2時間にわたり、徳照館2階共同利用室において、学位申請者に対して、学力確認のための口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、的確かつ詳細な返答を行った。その内容は、正岡子規や三森幹雄という本論の主な研究対象にとどまらず、明治俳諧全般にわたり、またある場合には、江戸期の文学や絵画、また西洋から移入された心理学などの分野にも及んだ。提出論文の内容に関わる専門的知識はもちろん、関連する周辺諸分野についても、幅広い調査によって蓄積された教養を持つことが確認された。

また、続いて行った語学学力審査（英語）についても十分な力を備えていることが確認された。

よって、総合試験の結果を合格と認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： 正岡子規における「写生」概念の研究

——明治俳諧の諸相の中での再検討——

氏名： 青木 亮人

要旨：

本論は明治俳諧における正岡子規の「写生」を中心に考察したものである。子規の「写生」は「見たままをありのままに詠むリアリズム」と説明され、近代俳句の出発点となった、と意義付けられている。また、彼本人に関しては、病床に臥せりながらも『日本新聞』で俳論を発表し続け、俳句革新運動を速やかに成し遂げた、と述べられることが多い。

これらの説明は一見簡潔かつ当を得ているが、問題点もまた多数存在する。以下、章立に沿って検討していきたい。

本論は三部に分かれ、第一部「正岡子規の「写生」」は子規に注目した論考である。

第一章は、非常な勉強家であった子規の「写生」とは日本の韻文の伝統に支えられており、単に「見たままを詠む」句法ではないことを述べた。子規における「写生」とは、和歌から俳諧に至る長い歴史の中で培われてきた膨大な発想パターンや類型表現が、物の見方や感じ方に知らずに先入観として染みついてしまっており、そこから抜け出て新鮮な眼で物を眺めることの困難さを自覚した上で、不定型かつ偶然に満ちた眼前の現実を凝視することで、日本の韻文の強烈な先入観を払いのけるための認識ではなかったか、ということ进行分析した。いわば本章において子規の「写生」を理論的に把握したといえよう。

第二章は、『日本新聞』社員である子規で俳論を発表することが俳人として何を意味するものであったかを考察した。当時の俳壇において、子規は俳諧の素人、あるいは俳壇外の人物と見なされていた節がある。そして、「子規の俳句革新は速やかに行われた」と現在は説明されることが多いが、当時の資料を調査すると、俳諧宗匠達は、活字上では子規の諸俳論に関する反応をさほど見せていないことが判明したのである。また、当時は、俳人といえば宗匠株を有し、ある一定の手続きを経て初めて俳諧宗匠と認められるのが通例であったが、子規は無論それらの手続きを行わず、また宗匠として振る舞おうとしなかった。これは、当時の感覚では俳壇外の人間であることを意味しており、よって子規は「新聞記者」と非難されていた節が窺えるのである。また、子規は連句に重きを置かず、文学ではないことを揚言したこともあったが、当時の宗匠達においては表面上連句を単独の俳句より上位に置き、また連句を巻くことが宗匠の証でもあった様子が窺えるが、子規は連句を無視したのである。よって宗匠達は子規を「連句の巻けない素人」と非難したのであった。すなわち、本章では、「明治俳諧・子規・俳句革新」が一種の物語であり、実際は子規は俳壇の部外者に近い存在であり、また彼の主張を宗匠達がすぐさま諾ったわけではなく、批判の方が多かったことを検証したといえよう。

第三章は「連想」という語を手がかりとして、正岡子規の「写生」に心理学等の西欧思想の影響が見られる点を考察したものである。

現在、日常的に使用される「連想」は実際には明治期の翻訳語であり、また日本に移入されたばかりの美学や心理学等でのみ使用された学術専門語であった。東京帝国大学生でもあった子規は、学生時代に最新の西欧諸学問を熱心に学んでいた。「連想」という概念及び語を、彼は心理学教授元良勇次郎による「精神物理学」（当時の心理学の呼称）の大学講義等を通じて知りえたのである。子規がこれら西欧思想から得た知見は二点存在した。第一は人間の五官中で最も高尚

かつ精緻なのは「視官」である、という点であり、第二は人間の記憶の大部分は「視官」から得た実体験による映像である、という点であった。

「視官」を重視する「写生」は後に「物をありのままに見る」という理念となり、個人の実体験を重視する近現代の風潮と合致したために近現代俳句の大前提として発展したが、子規の「写生」は様相を異にしている。俳諧の膨大な知識を有していた子規は他俳人より「月並」の発想に縛られていた。そのため彼は、「視官」に訴える句を前にすれば、自身の「月並」の知識より素速く実体験の映像を構成すると考えたのであり、「月並」知識を否定するために「写生」句を主唱したのであった。本章では、「写生＝視覚」という認識が明治に移入された西欧諸学問の影響の下で成立したこと、また子規自身の「写生」は自身の先入観に揺さぶりをかける新鮮な映像の獲得にあったことを考察した。

このような子規の「写生」を、同時代の人気宗匠である三森幹雄との比較の中で改めて考察したのが第二部「正岡子規と三森幹雄」である。

まず、第四章で子規の「写生」を明治俳諧という場の中で分析し、また「写生」が俳諧にもたらした具体的な変化を考察した。

明治俳諧は「旧派」（旧来の宗匠達）が「月並」を詠み続けたが、「新派」（新時代の俳人達）子規が「写生」を唱えることで俳壇は刷新されたとされるが、当時大多数であったのは「旧派」で、「写生」は「只言」と批判されていたのである。そこで本稿は、三森幹雄に着目し、彼の視点から子規を捉えることで「写生」の分析を試みた。

幹雄は、短詩形である俳句は「余情」を大切にすべきと強調する。「余情」と対する理念は「只言」であり、それは単なる事実を細かく述べ、余韻が発生しにくい和歌及び俳句を指す。幹雄は、子規の「写生」を「只言」として否定したのである。

一方の子規は「余情」を否定し、「只言」としての「写生」を評価した。「写生」は一つの季節感を詠むことを重視し、それは実作において「一俳句に一季語」という前提となって定着した。しかし、蕪村、几董等の俳人達は季節のうつろいをあえて詠もうとし、明治期の幹雄も有する感覚であり、彼はそれを「余情」と評したのであった。ところが、子規は単一の季節における限定された景色のみを詠む「只言」を評価したのであった。本章では、近現代俳句は単一の季節のみ詠むことが賞讃されるが、それは実際には子規が定着させた認識であり、「余情」を評価する日本の韻文伝統からいえば特異な理念であったことを分析したのであった。

第五章は、前章で取り上げた三森幹雄の俳諧観を具体的に考察した。彼は「俳諧教導職」として活躍し、俳句とは教訓的、道徳的なものを十七字で表現しうる文学であることを強調したが、このような発想には、江戸中期以降に庶民教化運動と俳諧とが連動して広まった潮流を受け継いでいることを指摘した。すなわち、幹雄は江戸以来の俳諧における庶民教化運動を、明治という新時代に適応させる形で拡大したといえる。現在、幹雄のような俳諧観は明治期特有の特異なあり方であると見なされてきたが、江戸期の俳諧の側面を明治期に継承した宗匠であると捉えるべきであることを指摘したのである。そして、幹雄のような宗匠が人気を得ていたからこそ、子規の「写生」が新鮮でありえたことも指摘した。それを分析したのが第六章である。

従来、子規の「写生」は洋画との関係が指摘されてきた。しかし、「写生」がなぜ当時において革新的であったかは必ずしも明らかにされてこなかった。そのため、当時の俳句観の中で子規の「写生」を捉え直した上でその革新性を考察したのである。「写生」は絵画を比喻に用いて俳句観を述べたことが強調されがちであるが、「絵画を彷彿とさせる句」を賞讃する俳論は実際には江戸期俳諧より存在していた。すなわち、「写生」の意義は絵画を参照とした点ではなく、従来の俳句観と異質の理念を提示した点なのである。

その「写生」の意義を捉えるため、三森幹雄との比較において検討した。幹雄は「近景—遠景」の配合による浮世絵的な構図の句を推賞したが、それは歌川広重等の浮世絵と共通する遠近法である。一方の子規達は、そのような構図による句作を論で推賞することはなく、「近景」の事物

を微細に詠むことで一幅の小画を彷彿とさせる遠近法を賞讃した。これが「写生」の第一の斬新さで、すなわち微細な「近景」を強く提唱した点が非常に新鮮であったといえよう。

また、幹雄達は眼前の景物から教訓・道徳的な要素を引き出す句作を賞讃した。事物の形状自体を詠むのではなく、そこから人間の生活に有益な教訓等を引き出すことが推賞されたのである。一方の子規達は、事物から教訓等を全く引き出さずに詠んだ点が特徴的で、どのような教訓も看取せず、事物の形状そのものを描くのみなのである。ここに「写生」の斬新さがあり、それは「事物から教訓等を全く引き出さず、ありのままを眺めるのみで満足する」という視線であった。「写生」は、子規が提唱した当時は大きな勢力を誇った幹雄達の眼差しを無視したような眼差しを主張した点が斬新であったのである。

すなわち、「写生」とは眼前の事物をより眺める認識ではなく、幹雄達が築き上げた先験的な概念を見ないように努めた認識であったことを指摘した。

そして第三部「明治俳諧の諸相」で、子規及び幹雄のような俳諧観とまた異なる形で俳諧に親しんだ俳人達の存在を指摘した。

第七章は、晋永機という幹雄と同等かそれ以上の人気を誇った宗匠と、尾崎紅葉等の集った秋声会がどのような俳諧観を有していたかを調査した。彼らは、子規や幹雄のように論を戦わせることなく、社交サロンの紐帯として俳諧を嗜んでいたのである。いわば、明治期にはディレクタントの嗜みとして俳諧が存在していたことを本章で指摘したのであった。

そして、第八章では、前章で扱った俳人達も見知っていた「蕪村」に対する俳人達の認識の相違を述べた。現在、「蕪村」第一発見者は子規達であると見なされているが、実際には子規以前に永機や幹雄達が言及している。しかし、「蕪村」を実作の現場で、優れた句作者として受容したのは子規達のみであったことを指摘したのであった。

終章においては、明治俳諧には子規達のみではない宗匠達が存在し、また現在では消滅した多様な可能性を有していたことを認めつつも、本論で扱った明治期俳人達の中で子規達のみが従来と異質の作品を提示し、しかも魅力ある作品であった可能性の高いことに言及することで、「明治俳諧・子規・俳句革新」という従来の史観は検討と批判を加えた上で擁護すべき史観であることを述べた。

本論は明治俳諧の多様性を指摘するとともに、子規の「写生」の可能性を従来と異なる角度で考察した。現代俳句にも強い影響を与える「写生」の認識そのものを問い直し、またその発生時における明治期の多様さを調査することは、今後の俳句の可能性を考察するものでもある。